フランス城郭シリーズ 7

～ ルイ 14 世とヴォーバンの城郭建設を中心に ～

37 回生 竹本 修文

はじめに

フランス城郭シリーズ５～ルイ 13 世の城壁と、同シリーズ６～シャルル５世の城壁追加版を投稿した。
シリーズ６の第３項では、1575 年の絵地図を引用して、武器の発達などで壁だけでなく、壁の周りに堀を追加したり、壁から外に向けて複数の**陵堡** Bastion を突き出し、陵堡と陵堡の間の城壁の上を兵士が武器を持って移動しやすくする為の**塁壁** Rampart を設けたりしている。そして、いよいよ 17 世紀、**太陽王ルイ 14 世**の時代になり、軍事施設技術者のヴォーバン **Vauban**（Sébastien Le Prestre de Vauban, b.1 May 1633 – d.30 March 1707）が活躍する.

1. ブザンソン城 Besanson

① ランス城郭シリーズ６、第５項の**サン・マルタン凱旋門**の時に予告した通り、ブザンソン城を最初にとりあげる。
1661 年に宰相マザランが死去したが、22 歳のルイ 14 世は新たな宰相を置かずに、親政を開始した。
ルイは、「国王は政治を他人任せすべきでない」という信念を持っており、最高国務会議を改組し、国王の意思に忠実で有能な少数の重臣を会議の構成メンバーとし、重商主義体制を作り上げた。この年にヴェルサイユに新宮殿の建設を始め、1682 年には未完成だったが宮廷をここに移した。ルイは 1668 年に**西仏戦争**に勝利し、スペイン領だったブザンソンを征服し、軍事技術者のヴォーバン Vauban に要塞化を指示した記念すべき城塞である。

図１

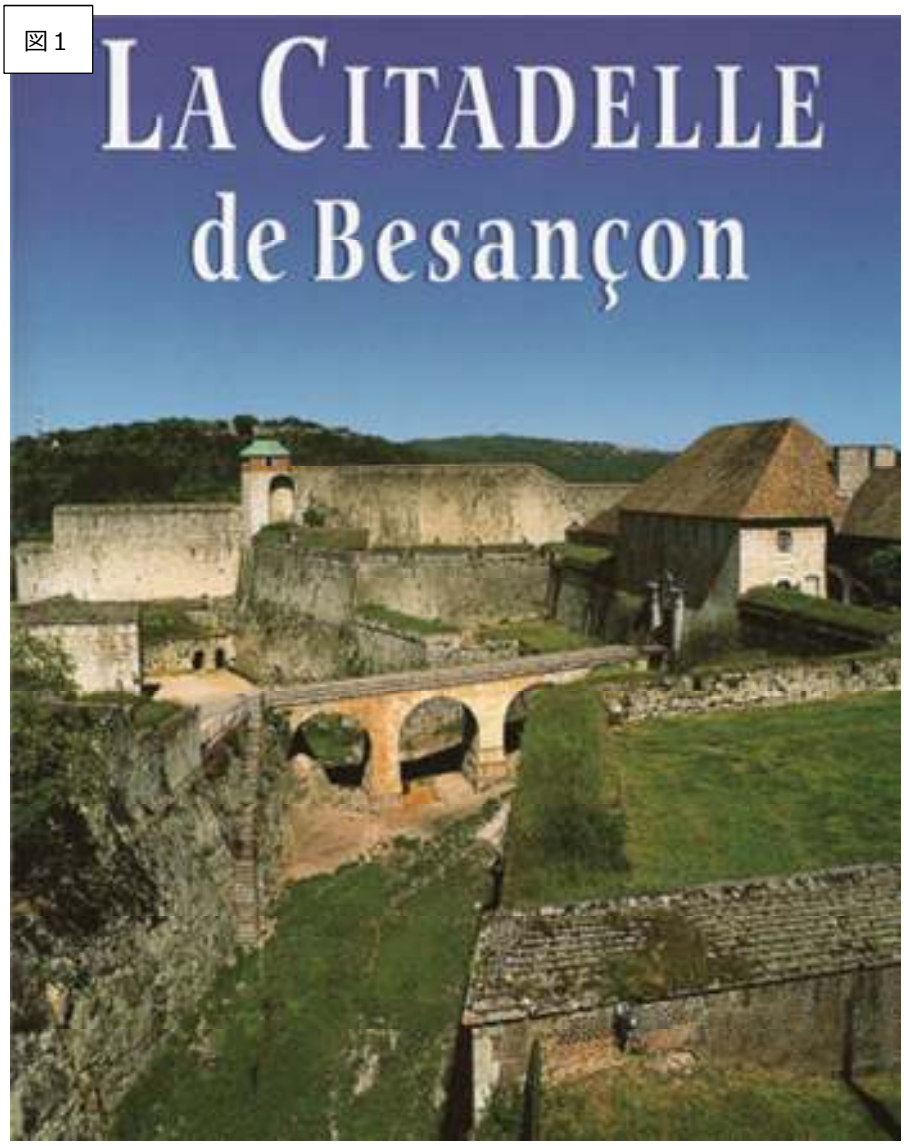


図１出典：Marie-Helene Bloch
Editions La Taillanderie-2004

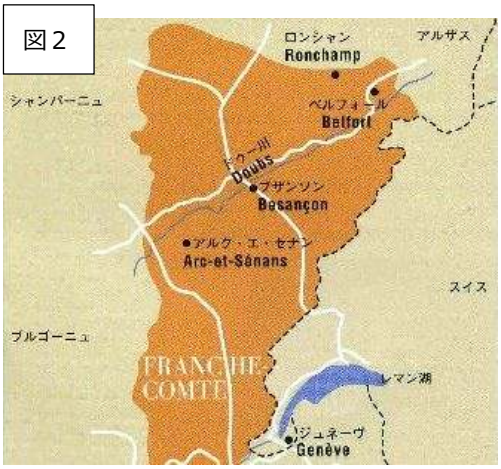
② ルイ 14 世とヴォーバンの城郭建設技術に関して、専門書から引用する。
「17 世紀のフランスはヨーロッパ屈強の軍事国と云われ、ルイ 14 世当時には頂点を極めているが、その下で技術将校・築城家として仕え元帥にも叙せられたヴォーバン将軍が、いわゆる**ヴォーバン式要塞**と呼ばれる近代城郭モデルを集大成した。
1633 年に生まれたヴォーバンは西仏戦争、フランドル戦争、オランダ戦争さらにはアウクスブルグ同盟戦争に係り、160 にのぼる要塞、城郭都市を築城して、これらの主なもの 12 城は「**ヴォーバンの防衛施設群**」として世界遺産にも登録されている。」
出典：30 回生・西内一(著)、「福沢諭吉の築城書訳から」涼川会文集 第１巻 第１号 2012 年

制作：竹本 修文

③ **フランシュ・コンテ**（Franche –Comte）と首府**ブザンソン**（**Besançon**）（チーズの産地、コンテとモルビエ）

フランシュ・コンテは 12 世紀に神聖ローマ皇帝からブルゴーニュ伯爵領に与えられた名前で,ガリア人が住んでいたが紀元前 2 世紀にローマの支配下になり、5 世紀にはブルグンド族が侵入し,リヨンを首都とするブルグンド王国を作った。その後フランク王国に併合され、ヴェルダン条約以降分裂、1032 年にブルゴーニュ王国が神聖ローマ皇帝コンラド 2 世に渡った。しかし、1127 年に一地方伯爵の Raynald III がドイツ王 Lothair II への忠誠を拒否し、自由な伯爵 the franc-comte になった。15 世紀末ハプスブルク家の領有となり、スペイン国王の支配下に置かれたが臣従の関係のみでありスペイン人は誰一人来たことが無い。フランス領になったのは 1678 年。

図 2



ブザンソンは、フランシュ＝コンテ地域圏の首府。ドゥー川によってＵ字状に形づくられている。ガリア・ローマ時代以降、重要な役割を果たし、丘陵と川に囲まれた自然の城塞都市。フランスの最初の緑の都市と宣言されて、社会的・環境的革新によって 生活の水準の高さを享受している。文豪ヴィクトル・ユーゴーや映画の発明者のリュミエール兄弟を輩出した街でもあり、生家が今日も保存されている。1948 年以来、毎年 9 月にはブザンソン国際音楽コンクールが開催され、日本人指揮者小沢征爾も 1959 年にこのコンクールで若手指揮者として受賞した。城砦はガリアの時代に既に存在し、最も優れた城砦の一つであった事がカエサルの**ガリア戦記**に記録されている。ルイ 14 世の下で Vauban が三重の城壁で囲まれた要塞に改造した。要塞はＵ字状に曲がったドゥ―川に囲まれた岩山の上に築かれている。現在、城砦の内側にレジスタンス資料館は、戦時中にはこの要塞に強制収容所があったことや広場には銃殺刑の際に使用された杭が残されている。城砦からは街が一望できる。

図３．出典：ミッシュラン・ガイド

図４

図５

訪問時は知識が無かったが、城郭を出て空堀を橋で渡ると、Dem-lune 仏語で半月が写っていた。「馬出し」である。

④　図１と同じ出典のガイドブックから、絵図と写真を引用して並べてみた。図６はスペイン領時代の 1668～1674 年、図

７はヴォーバン設計から 1755 年まで、図８は現在の航空写真である。

図６

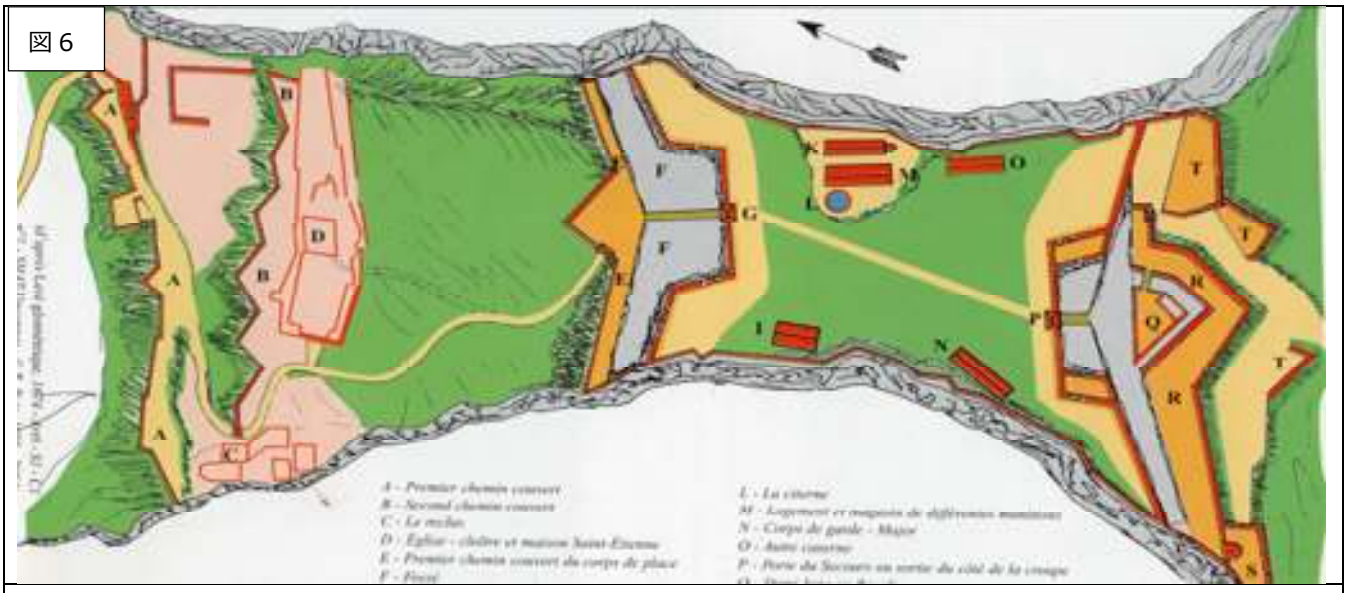


図７

図８

図４、５は、図７の馬出しⒷの付近です。

制作：竹本　修文

⑤ 比較のポイント：

・**図 6** は、17 世紀の初期の**山城**で、左側に川で囲まれた市街があり、斜面で二つの**空堀**に挟まれた城郭中央部と繋がっていえう。左が北であり、想定する敵国は北のオランダとフランドルである。

・**図 7** は、ヴォーバンが設計に着手して約 30 年後の姿である。空堀は市街側に増設し、市街側から攻めてくる敵軍に対する防御として、馬出しが二か所に作られている。

2． **ヴォーバン式要塞の補足説明** ①**ブライ城**、②**リール城**、③**アラス城**などを紹介するに当たって補足する。

① ヴォーバンの防衛施設群は、2008 年の第 32 回世界遺産委員会で登録が決定されたフランスの世界遺産の一つである。築城の名手ヴォーバンが築いた**稜堡式要塞**など、要塞や都市の城壁を対象とするものであり、ブザンソンをはじめとするフランスの 12 箇所に残る物件がまとめて登録された。**ブライ城**もその一つである。

② 城郭用語を追記する。**城塞**（英語: citadel）とは都市・町の一角に建てられた要塞を指す。**城堡**とも呼ぶ。都市の支配者・武力集団を堅固に防護する目的で建てられる。支配者が居住する**城館**を兼ねることも多い。日本で通常言うところの「**城**」に当たる。城塞は、城郭都市全体を囲んで守る**城壁**（市壁）とは異なり、都市の一角に建つ。城塞には都市の支配者（軍隊・政治家・王侯貴族）を収納し、外敵や、もし都市住民たちから攻撃を受けた場合に、その攻撃からも守る目的を持つ。 出典：ウキペデイア、世界遺産・ヴォーバンの防衛施設群

③ **星形要塞**は火砲に対応するため 15 世紀半ば以降のイタリアで発生した築城方式。**イタリア式築城術**、**稜堡式城郭**、**ヴォーバン様式**という名で分類されることもある。15 世紀半ばのイタリアでは戦争で大砲が使われ始め、高い石壁でできた要塞が破壊された。15 世紀末から 16 世紀初期に石に代わって**レンガ**が使われ、石と比べると大砲の弾で砕け散る事が少ない事が分かった。また、多方向から飛んでくる銃弾を避ける為に星形要塞が考えられ、**ミケランジェロ**がフィレンツエの土塁要塞に採用し、ルネサンスの建築家たちが、更に発展させた。フランスのシャルル 8 世以来、フランソワ 1 世などが進んだ火砲を使ってイタリアに侵攻し、いわゆる**イタリア戦争**を戦った。これに対応するために、イタリアから始まった。

（出典：ウキペデイア、星形要塞

2. **ボルドーのブライ城 Blaye**

① ジロンド川の右岸の岩山に中世から砦があり、14 世紀初めに百年戦争のイギリス軍との戦いが行われている。
百年戦争以前のボルドーは、イギリスの領地であり、ボルドーのカベルネ・ソーヴィニヨンとメルローの濃厚な赤ワインはイギリスとオランダで好まれた。 パリのフランス貴族は川と運河で水路が繋がっているブルゴーニュのピノ・ノアールを好んだ。

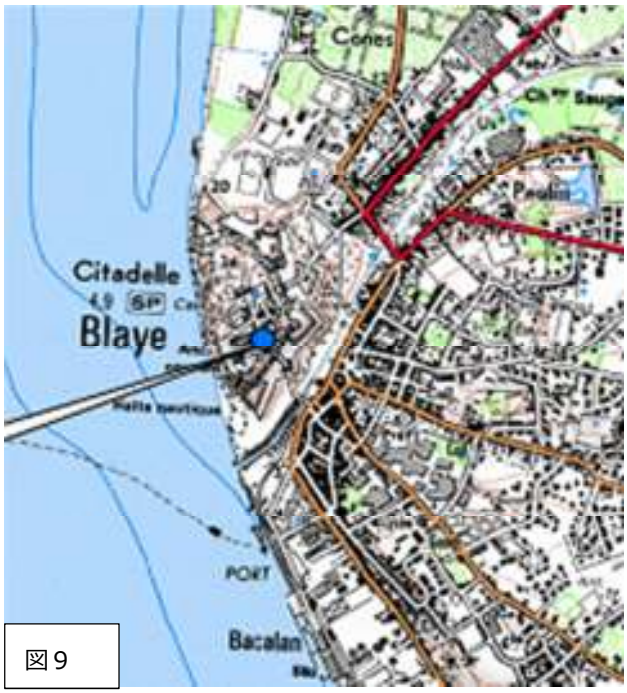


図 9

図 10

制作：竹本 修文

② ルイ 14 世は 50 ㎞上流の**ボルドー市街**と、ジロンド川―ガロンヌ川―ミディー運河を経由した**地中海都市との交易**を海からの敵（イギリスの事）から守るために中世の城郭を近代化したが、現在の城内は商店街になっており、ヴォーバン様式の要塞はわずかな遺跡と絵でしか確認できない。

図 11

図１２

3. **リール Lille**

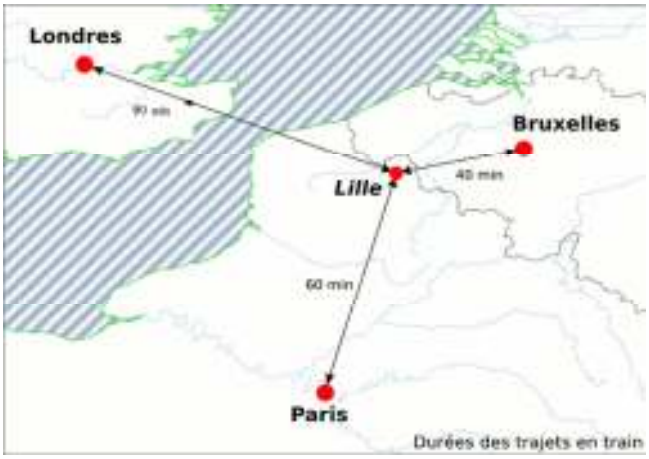
① 概要：1667 年、リールはフランス軍に包囲・占領されたが、1708 年の**スペイン継承戦争**では、**ヴォーバン**によって構

築された要塞が敵に攻略されてしまい 1713 年までリールはヨーロッパ同盟の手中となった。

注：**リール包囲戦**は、スペイン継承戦争中の戦闘の一つで、1708 年 8 月から 12 月までイギリス・オーストリア・オランダ同盟軍がフランス軍が籠もるフランス北部の**要塞都市リール**の包囲を敢行した。

② **パリ北駅**からリール＝ヨーロッパ駅へは超高速列車 TGV で約 1 時間。500m ほど離れた昔からのリール＝フランドル駅にもパリ直行の TGV が乗り入れる。

③ フランス第 4 番目の都市で、パリからの所要時間は 60 分、ブリュッセルまで約 40 分、ロンドンまで約 80 分である。写真はロンドンに旅行中に、開通したばかりのユーロトンネルを Eurostar に乗って通過するだけが目的で、ロンドン・ウオータールー駅（当時）からリールを日帰り往復した時のもの。翌年は第一次・第二次大戦の戦跡を一人旅で歩いた。



④ 図 13 は、ルイ 14 世とヴォーバンが元気だった 17 世紀のリール要塞都市、図 14 は現在のリール。両図の星形城塞は同じ位置にあるので、縮尺は多少違うが、比較できる。図 13 の 17 世紀のリールは、要塞都市がすべてであり、軍事施設の星形要塞と市壁で囲まれた Cite が分かれている。現在は Cite の市壁は無く、普通の市街になっているが、道路や川に痕跡が残っている。図 15 の星形要塞を見にタクシーで緑の公園に入っていったら、銃を持った兵士が出てきて、用件を聞かれ、「城を見学に来た」と言うと、「ここは、フランス陸軍の軍事施設であり、公開してない」と断られた。怖かった

図 13

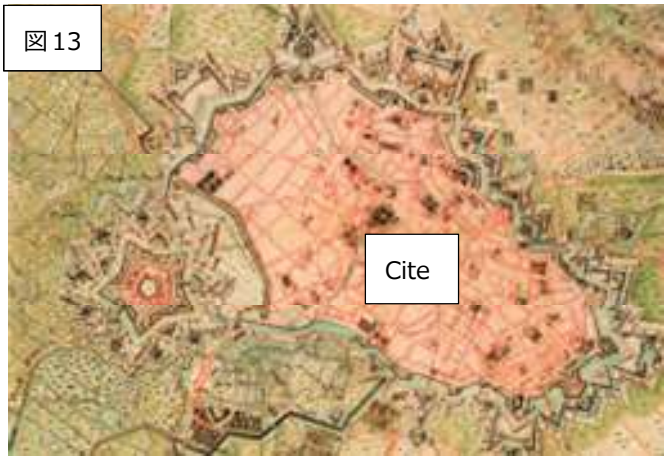


図 14

図 15

制作：竹本　修文

4. アラス城塞 Arras' Citadel

当時スペイン領だったオランダに駐留していたスペイン軍がフランスに侵攻してくるのを防ぐ目的で、ルイ 14 世はヴォーバンにアラスに城塞を建設するように命令し、1668 年から 1672 年にかけて建設した。しかし、アラスの市民はこの城塞に「美しく、役立たずの要塞」とニックネームを付けた。理由は、一度も戦いに直接関わらなかったし、第 1 次・第 2 次大戦でドイツ軍の侵攻を防げなかったからだ。筆者がアラスを訪問した目的は、北フランスからベルギーにかけては、両大戦の激戦地で沢山の戦没者墓地やモニュメントがあるので、目で見ておきたかったからだった。

図 16 の星形要塞は、図 17 の星形要塞と同じである。ここも、リールと同様にフランス陸軍の軍事施設である。

図 16

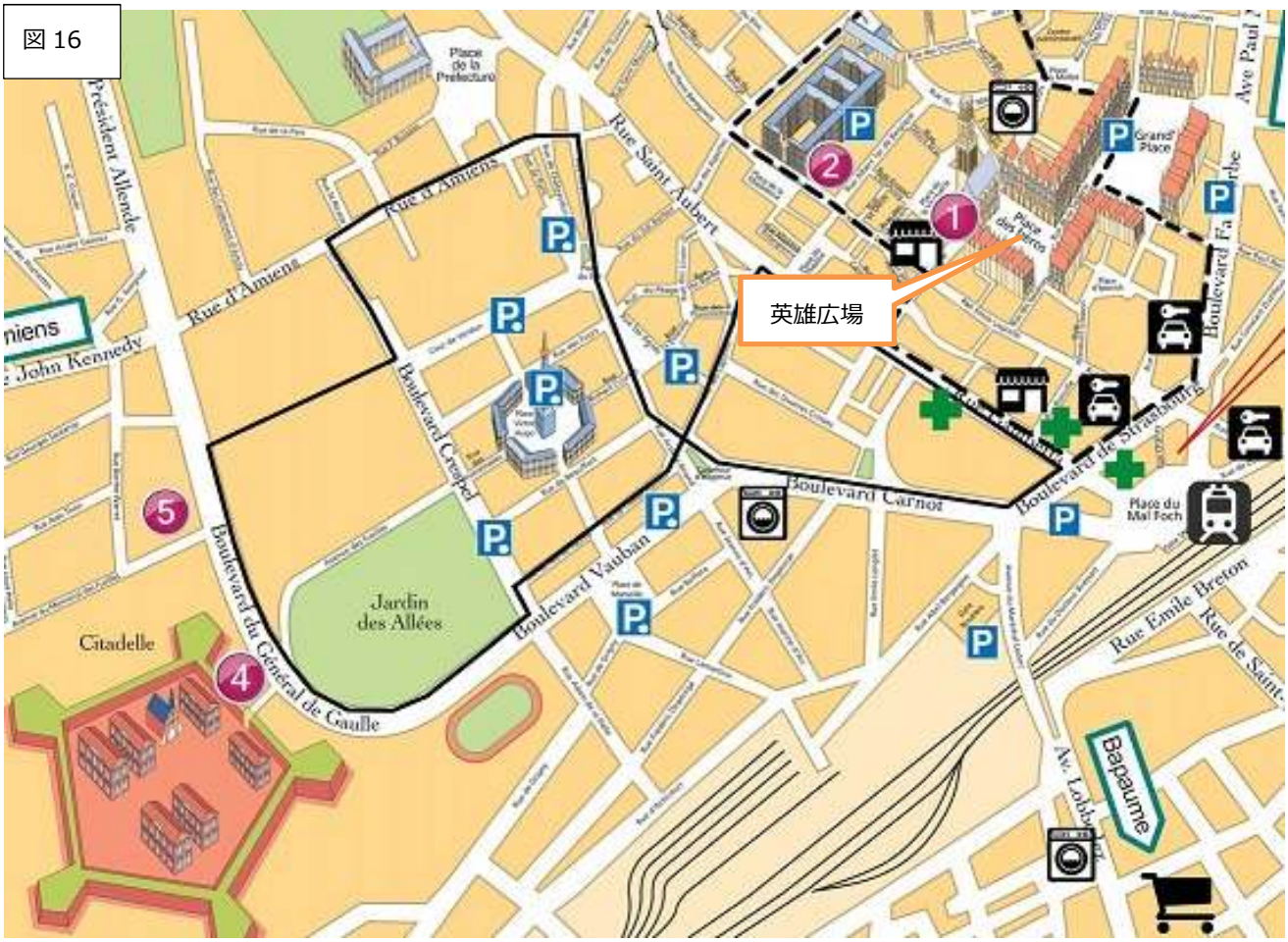


図 17

17 世紀のアラス城塞都市、現在は市民の居住地 Ville と Cite は無い

アラス駅前に立つ戦没者慰霊碑

余談：アラスはタペストリーの生産で有名。京都の祇園祭の有名な山車にヨーロッパのタペストリーが使われていて、フランドル製とかゴブラン織りとか言われているが、最も可能性が高いのがアラス製とも聞く。ゴブランはパリのゴブラン工場で間違い。

以上

制作：竹本 修文